

2022年5月22日 復活節第6主日礼拝

メッセージ「苦しみが喜びに変わる日を待ち望む」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 16章 12-24 節

「苦しみが喜びに変わる」などということは、本当にあり得ることなのでしょうか。むしろ「そんなのはあり得ない。うそだ、単なる気休めだ」と言われる方が、多くの人が納得できそうです。しかし、聖書の中では、先ほどの「招きの詞」でも読まれたように、「嘆きが踊りに変えられ」（詩 30:12）、「涙は喜びに変えられ」（詩 126:5）、苦しみは喜びに変えられると、繰り返し述べられています。

今回の箇所「ヨハネによる福音書」16章22節では、「女が子どもを産むときには、苦しみがある。その時が来たからである。しかし、子どもが生まれると、一人の人が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない」と言って、女性が子どもを出産する際の「陣痛」が例として採り上げられ、いわゆる「産みの苦しみ」について述べられています。そのために、その部分だけを読むと、それぞれ、「何か良いものや、価値のあるものを得るためには、その前に苦労は付き物だから、今はとにかく我慢して忍耐することが必要です」と受け取られてしまうかもしれません。ですが、本当にそうなのでしょうか。

今回の箇所は、イエス様が捕まえられて十字架に架けられて殺される前日の夜、いわゆる「最後の晚餐」の席で、弟子たちに様々な話をした中の一つのお話です。とくに「ヨハネによる福音書」では、イエス様の話は長く、13章で始まった夕食は17章までずっと続き、その間ずっと様々な話をしています。その中で「これから自分は裏切られ、捕まえられ、あなたたちの前から去っていく」と弟子たちに告げられ、不安がる弟子たちに対して語られたのが、今回の話でした。

聖書の中で、何度も登場する言い回しとして「恐れるな」「怖がることはありません」という言葉があります。「神様があなたと一緒にいるから怖がらなくても大丈夫」ということですが、この言葉が様々な人々に対して、弟子たちに対しても、ヘブライ語聖書に登場する預言者たちに対しても、何度も何度も繰り返し述べられているというのは、裏を返せば、「人間はいつでも恐怖を感じ、不安を感じやすい生き物だから」と言えるのではないかと思います。

イエス様について来た弟子たちも、このイエス様こそ、自分たちを解放してくれるメシア、救い主だと確信して、ここまでの道のりについて来たのに、ここに来て「自分はこれからいなくなる。権力者たちによって逮捕されるだろう」と言い出されたら、不安になります。「先生、何をおっしゃっているんですか」「先生がいなくなったら、私たちはどうしたらいいんですか」。そうやって不安がる弟子たちに対して、イエス様は 12 節にあるように、この後には自分に代わって「真理の霊」すなわち「聖霊」がやって来て、あなたたちを正しい道に導いてくれるから大丈夫と告げています。それから 16 節以降が、先ほどの「産みの苦しみ」の話へと続いていきます。

このイエス様と弟子たちとのやりとりは、十字架に架けられる前夜の話とされていますが、実際にこのような順番にまとめられて書き記されたのは、それから 50 年も 60 年も経った後、このお話に登場する弟子たちの 2 世代も 3 世代も後の時代のことでした。紀元前 1 世紀の末の頃、最初期キリスト教共同体の人々は、支配者であったローマ帝国からも、ユダヤ教を始め他宗教の人たちからも異端視され、迫害、冷遇されていましたが、そのような中で、自分たちの原点であるイエス様と弟子たちとのやり取り、言葉を思い出しては書き取り、このような福音書の形にまとめました。ですから、この「苦しみが喜びに変わる」という話は、実際のイエス様から半世紀以上が過ぎた後の、一世紀末の教会の人々から見た当時の弟子たちへの評価でもあり、なおかつ自分たち自身に向けた励ましの確信でもあったのだと思います。

「苦しみが喜びに変わる日が来る」とは、聖書が伝えている通り、古代イスラエル民族がずっと信じていた神様の約束の言葉であり、胸に抱いていた希望でした。その言葉の裏には、イスラエルの民がかつて奴隷であり、土地を持たない放浪の民であり、小さく弱く貧しい民族であったが故に、苦勞のない時はなかったという事情があります。イエス様と出会った後も、弟子たちを始め、初代教会の人たちも皆、ずっと苦勞の中にありました。にもかかわらず、彼らは諦めることなく、絶望して自暴自棄になることなく、この「苦しみが、喜びに変わる日が来る」と信じて、歩んでいました。それこそが、イエス・キリストが「十字架にて殺されから、3 日目に死から引き起こされて、復活し、今も生きて、全ての人と共におられる」ということなのではないでしょうか。

「今の苦しみは、やがて喜びに変わる日が来る」という言葉だけを取り上げると、ともすると現在のハラスメントを容認する言葉のように、受け取られてしまいかねません。「成果を出すためには、これくらい厳しくしなければいけない」といって、音楽でもスポーツでも、また仕事の上でも、「苦しいことを我慢して我慢して、忍耐した末に、成功がある」「私が成果を出せたのは、あの厳しい指導のおかげ」と長く言われて来たのではないかと思います。その結果は自分が受けてきたハラスメントを、次の世代にも押し付ける「ハラスメントの連鎖」と、たましいが破壊され、生きる意欲を失い、絶望し自暴自棄に走る人々の姿なのではないでしょうか。ですから、苦しみ自体に意味があるのではありません。また「それ自体を求めなさい」と言われているのでもありません。むしろ、求めていなくても、常に周りに溢れている様々な苦しみを日々前にする私たちに、神様は「怖がらなくても大丈夫。目には見えなくても、私がいつも一緒にいるから、あなたは一人じゃないよ」と語りかけてくれているのだと思います。

私たちは意味のあることにはやる気も出れば、我慢することもできますが、逆にやってもやっても意味のないことには落胆し、がっかりしてしまうものです。だからこそ苦勞の意味づけは大事になってきます。しかし、そのような苦勞の意味は、「この苦しみは、〇〇のためにあるんだよ」という風に、他人から与えられるものではないはず。何故、今こんな苦しみを与えられているのか、たとえすぐには分からなくても、時には数年後、数十年後であったとしても、「あの時の苦勞は、このためだったんだ」と自らの内に気付くことがある、意味づけすることができる時が来る。それが真理の霊によって導かれた「苦しみは喜びに変わる日」なのではないでしょうか。

今、世界は大きな呻きと苦しみの中にあります。新型コロナウイルス感染症は感染を広げながら、新たな変異を続けていますが、日本を始め多くの国では、まるでもう収束したかのように「気にしない」風を装っています。ロシアとウクライナの戦争も終わりが見えません。ひとたび核兵器が使用されたら、この地球は死の星になってしまうかもしれません。そんな恐ろしい現実に向き、現実の苦しみから目を逸らして、時の権力者が言う「これが正しい道です」「こちらに喜びの日があ

ります」という言葉を鵜呑みにしているだけでは、私たちは道を誤って、命に向かうのではなく、死に向かって行ってしまいます。

まずは現実を直視すること。その苦しみを知った上で、そこから今何が出来るかを考え、『苦しい』『痛い』と呻きつつ、仲間と共に試行錯誤しながら歩みを進めること。その中に神様も共にいてくださって、私たちはやがて今の「苦勞の意味」を知り、「苦しみが喜びに変わる日」を迎えることが出来るのではないのでしょうか。だから、諦めず、投げ出さず、かといって無視せず、見つめること。イエス様が、十字架の死という苦しみの果てから、引き起こされ復活されたのも、そのような私たちの苦しみを共に担うためであり、私たちが滅びの道から命の道を選び直すためであったのではないかと思います。

苦しみが喜びに変えられる日が必ず与えられることを待ち望みつつ、私たちは今日も、共にいてくださる神様に導かれながら、歩みを進めて参ります。